

# 27AB-pm431

子宮頸がん予防ワクチン接種の自己決定に影響を与える要因

○田島 遥那<sup>1</sup>, 森 万里奈<sup>1</sup>, 町田 いづみ<sup>1</sup> (<sup>1</sup>明治薬大)

【序論】子宮頸がん予防ワクチンの接種は現在積極的な奨励は行っておらず、有効性とリスクを理解した上で受けること、としている。そこで、子宮頸がん予防ワクチンの接種行動と接種に関するアドヒアランスの関係について検討する。

【目的】中1から高1年生の娘を持つ母親へのアンケート調査から、子宮頸がん予防ワクチン接種の自己決定に影響を与える要因を明らかにすること。

【研究の対象と方法】インターネットによるアンケート調査により、2015年6月17日から19日の調査期間内に1030人の回答を得た。

【調査の内容と解析方法】調査内容は背景要因、身近ながん罹患率、健康診断の受診頻度、子宮頸がん及び子宮頸がん予防ワクチン・定期接種ワクチンに関する知識、子宮頸がん予防ワクチン接種に関する状況である。解析は「接種した群」「接種しない群」「迷っている群」の3群間で行った。

【結果・考察】接種行為の是非を決定した理由として、接種した群では効果への期待感と公費助成制度が、接種しない群では副作用への心配が、迷っている群では副作用の心配に加えて周囲の接種状況が多かった。各群の主な情報収集源は、接種した群は公的機関から、接種しない群はマスメディアからであった。しかし、両群共に子宮頸がん及び子宮頸がん予防ワクチンに関する知識量は極めて低く、自己責任を伴う自己決定であったかは疑問が残る。人々が正しい知識を持ち、接種行為の是非を自己決定出来るよう導いていくことは、薬物治療の専門家である薬剤師の責務ではないかと考える。また、迷っている群の多くが、情報は得たいが得られる場所や時間がないと回答していたことは、情報提供に関する今後の課題になるのではないだろうか。